日本医史学雑誌第二十九巻一号
昭和五十八年一月三十日発行

昭和五十七年十一月二日受付

日葡辞書から見た安土桃山時代の医学——

二、くすり

亀節子
大槻彰
前川久太郎

「動物のうちの最も長命なものと最も短命なものをその両端とする対数尺度のうちに人間をおけば、われわれはその最も長命な極のほとんどすぐ近くにいる。人間は事実、人間よりもはるかにからだの大きい動物たちよりも長命を享受している。

しかしこのように数学的に検証してみても人間の生の「みじかさ」を実感しておののいている人はけっして納得しない。人間の生命が仮りに二百年であり、あるいは二千年であっても、かれらはそのことに納得しないように文化を作っていただろう。」(『時間の比較社会学』真木悠介著)(1)

動物と人間を境界付ける或る不安な欲望の中に、くすりの存在意義のふたつの側面が浮かび上がってくる。ひとつは疾病から回復するためのものであり、他のひとつは、より長い生命(=時間)の獲得を目指すためのものである。実際、傷を負った野生動物が鉱泉に身を浸すことはあるにしても、動物が不老や不死を願って自然をまさぐりながら山野を徘徊す

るようなことはあり得ない。

自然界のある対象がくすりとして自覚されるのは、いつの頃からか、病気や老いや死に対する不安な意識と不可分である。そして、それはそのまま、文化の中での時間経験の質の問題へと集約される。

くすりや医療との人間の関わりを考察する根底に、欲望という衣裳を纏って生活空間を侵蝕する時間表象を、ある社会の中に生まれ、老いて、死んでいく人々がどのような形で日常の経験の中に取り込んでいるのかというひとつの視点もまた据え置くことを忘れてはならないだろう。近年の文化人類学の諸成果が、過去、現在、未来という時間観念さえも文化として作り出されたひとつの表象に過ぎないことを提示してやまない今日、田道間守が非時香果を求めて旅立ったとされる垂仁天皇時代は、同じ二十世紀という時代を生きながらも事実上未来という時間意識を持たないとされるケニアのカムバ族に比べ[2]、文化の形態としては、はるかに現代のわれわれに近接したものだと捉える観点に立たざるを得ない。

歴史の記銘された連続性にのみ立脚する思考に懐疑を抱きつつ、あらゆる「病」から解き放たれることを願いながら「医」の歴史を振り返ろうとするまなざしは、ミッシェル・フーコーがその著『言葉と物』に於いて「歴史性をもたらすものはもはや起源ではない。その横糸そのもののなかで、それにとって内在的であると同時に外部のものかもしれぬ、起源の必要性の輪郭を描きださせるのが、歴史性にほかならない」[3]と近代の思考の特質のひとつとして描き出しているかの歴史性そのものを身に被りながら、一方で、そこから脱け出し得る〈時〉を来たるべき知性の到来として、たとえそれが現代のわれわれが使用している時間尺度に於いて数百年、数千年先のことであるとしても、逆接的にも俟たなければならないのだ。

ジャンルを越えて、現代の知に要求されている姿の一端を、宇佐美圭司は次のように論じている。

「もし新たな全体性の表現が不可能なら、人類はエントロピー拡大の原理そのままに散逸していってしまうだろう。……私たちは、部分領域ではなく、全体が見つかるものとしての表現方法を発見していかねばならぬだろう。表現を情報量

とする分析からは、そのような方法は誕生しえない。なぜならそこでは情報活動そのものの根拠は不問に付されるからである。エントロピーが増大していくことを前提として情報が成立する。そしてその情報活動が分析されてエントロピー増大の原理が証明されるという手のこんだトートロジーなのだ。……全体性の回復＝新たな空間概念の成立以外に、トートロジーから離立する情報はないのである。[4]（『絵画論』宇佐美圭司著）

現代の各学問領域にも共通するこうした問題意識を孕みながら、文化の全体像の中から人間のトータルな姿を把握しようとする試みは、医史学に於いてどのような形で可能なのか、知の営為そのものに纏わり付く根源的な戸惑いを残したまま、本稿では、前回に続いて『日葡辞書』に収録された医療、身体、病気などに関する語のうち、研究諸氏の一助となるべく、くすり関係の用語を紹介すると共に、若干の考察を付け加えたい。

*

今回『日ポ』の中から拾い上げた薬種・薬草・売薬関係の語は二百二十語であり、これは、収録語総数のほぼ百五十分の一に相当する。特に目を引くのは、薬種の多様性と漢薬名の豊富さであるが、これを基源別に分けてみると、鉱物性薬十五語、動物性薬十五語、樹脂・エキス・酵母製剤類七語、虫瘻類一語、菌類三語、上記以外の植物性薬百二十四語、またその他、売薬・方剤名十四語、薬性・薬能等に関するもの四十一語となり、以下、この分類に従って各語を列記してみると次のようになる。なお、特徴があると思われる説明事項を付記すると共に、問題点もまた各分類ごとに併せて取り上げてみたい。

（一）鉱物生薬　十五語

大赫石　炉甘石　雄黄（ヲウワウ）（シナの薬）白礬　赤石脂　辰砂（シナの或る薬用の石）丹砂　丹（薬用になる赤い色の石）丹（明るい赤色の粉末になった染料でまた薬としても用いられるもの）丹薬　石膏　砒礜（＝ねこいらず）ばうしょ（＝ある薬）陶砂（ダウサ）胆礬

①砒素の硫化物である雄黄は「ヲワゥ」と発音され、タデ科の多年草の雄黄、即ち大黄が「ウワゥ」と発音されるのと区別される。

②「辰沙本名丹沙。又云朱沙益出支那辰州-故名=辰沙-」と『書言字考節用集』（明和三年版）にもあるように、辰砂と丹砂は同じものを指していた。なお、『太平記』に「風ヲ治スル薬ニハ、牛黄金虎丹・辰沙天麻圓ヲ合セテ御療治候ベシ」[5]とあって、その性が寒で、熱を清す作用のある辰砂が、風邪薬として扱われていたことが窺える。

③砒礒は、その毒性から、当時もねずみを殺すのに用いられていたらしい。ところで、薬が転じて毒となり、毒が転じて薬となる実例のひとつとして、この砒礒石を飲んで梅毒を治した手代の話が『譚海』（安永～天明年間）に記載されている。[6]

④「ばうしょ」を「芒消」と解するならば、これは傷寒論や金匱要略に記されている上、正倉院御物の中にも見い出すことのできる古方漢薬である。

（二）動物性薬　十五語

阿膠　犀皮　べっこう　蛇骨　白花蛇　烏蛇（＝蛇かやもりかを干したようなある薬）竜骨　羚羊角　鵜の黒焼（鵜から作る薬。すなわち、鵜を炙り、鍋に入れて炒り焦がして炭にしたものであって、何かの骨とか魚のとげとかが喉にささったのを下へおろすのに用いられる薬）白彊蚕　蟬蛻　ろほう（＝ある薬）牡蠣（ボレイ）（＝牡蠣の貝殻を焼いて作った薬の一種）石薬（＝薬になる石で、羊黄、胃石などのようなもの）牛黄

①「ろほう」については不明であるが、一応、「露蜂房」の謂であると解釈して動物性薬の中に分類した。これは、スズメバチ科の昆虫の巣を乾燥したもので、『神農本草経』では中品のひとつとして収載されている。

②石薬は、鉱物性薬を意味する薬石と混同しやすいが、『日ポ』の「pedra de bazar」という原文の説明は、牛や山羊

などの胃腸内の結石を示すもので、かつては解毒剤として使われていた。

（三）樹脂・エキス・酵母製剤類　七語

安息香（＝薫香に似たある薬種）薫陵（＝安息香）干漆　蘇合油（＝シナから渡来した薬用になるある種の樹脂）没薬（＝シナから来るある薬方）阿仙薬（cacho と呼ばれるある薬）神麹

①六品とも古くに渡来した外来品であり、それぞれの主産地は、安息香がスマトラ、薫陵がインド、干漆が中国・ベトナム、蘇合油がトルコ西南部、没薬がアラビア南部、阿仙薬がマレー半島となる。

②安息香と薫陵は、鑒真が最初に渡航を企てた際の携帯品の中に入っていたとされ、(7)『日ポ』では両者が混同されているが、もともとその基源は別物で、前者がエゴノキ科の樹脂であるのに対して、後者はウルシのガム樹脂より成る。

（四）虫瘻類　一語

五倍子（＝薬用になるある木の実）

①『日ポ』の説明は誤まりで、五倍子は木の実ではなく、ウルシ科のヌルデの葉の上にヌルデシロアブラムシが寄生してできる虫こぶのことである。中国では、唐の時代の『本草拾遺』（陳蔵器著）に於いて初めて記載されているが、我が国では、いつ頃からどのような形で使われてきたものか、『新添脩治纂要』（寛永庚辰年版）では次のように記されている。「和名　布志（フシ）　ヌルデノ木ノ實ナリ。ハマクリヲモ文蛤（註一）ト云フ一名二物ナリ。本綱（註二）ニ詳ナリ。百薬煎ハ是ヲ製タルナリ。桑螵蛸氣味鹹ク甘シ平無レ毒」。(8)この和製の百薬煎について、遠藤元理の『本草弁疑』（一六八一年）には「百薬煎、即ち阿仙薬」とあるように、江戸時代、五倍子のエキスから百薬煎を作り、それを高価な阿仙薬と偽称していたものらしい。

（五）菌類　三語

猪苓　茯苓　茯神

①茯神は茯苓の根本に生えたもので、猪苓、伏苓とも『神農本草経』に既にその名を連ねている。ところで、『史記』では、サルノコシカケ科の菌核である伏苓を「伏霊」として記載しているらしく、[9]ガンの特効薬が種々取り沙汰されている今日、この古名が再び甦えることになるかどうか、興味を引く薬種である。

（六）果実・種子　三十二語

兎糸子　西海子　皂角　車前子　牽牛子（＝朝顔と呼ばれる花の種子で薬用に用いられる場合の名）大風子　檳榔子　枸杞子　山梔子（Cuchinaxi と呼ばれる小さな木の種子で薬になるもの）使君子　山査子　白豆蔻　巴豆　肉豆蔻　蓽茇　馬銭　瞿麦　連翹　天蓼　鶴蝨　麦芽（＝大麦の芽から製する薬）蒲黄　栝楼仁　蕪荑仁　杏仁　梅仁　そうくあ（＝ある薬）呉茱萸　木瓜　冬葵子　烏梅　茴香

①西海子は、植物の皂莢の古名で、民間薬のひとつとして考えられ得る。『大言海』によれば、皂角子→さいかいし→さいかち、と転じていったものらしい。これは、『下学集』（一四四四年）に「西海子　子以可洗馬也」とあるが如く、石鹸の代用を為していた。

②使君子は中国に於いては『開宝本草』（九七四年）に、また、山査子は『新修本草』（六五七年）にそれぞれ収載されているが、我が国に渡来したのは、両者とも享保年間のこととされている。したがって、『日ポ』には実物の使用を見ない、単に名義だけの記載が含まれている可能性が大きい。

③馬銭は、李時珍の『本草綱目』では「番木鼈（バンモクベツ）」[10]の名で収載されている。ストリキニーネを製するこの毒薬は中国にも

産せず、我が国にはいつ頃渡来したものか、狂犬病対策に用いられていた江戸時代、この馬銭を食べた狐憑患者が快癒したという記事が残っている。[11]

④「そうくわ」をショウガ科の多年草の果実である「草果」と解釈して、この分類の中に入れた。

（七）花類　二語

丁香　丁子

①両者は同じものを指し、その伝来は古く、正倉院にも現存する。

（八）果皮・樹皮　十一語

罌粟　陳皮　青皮（＝密柑と味ばれる小さなオレンジの緑色の時の皮で薬用にするもの）厚朴　大腹皮（＝薬の中に入れて用いる檳榔樹の皮）　黄檗　肉桂　椰（ナギ）　ゆはくき（＝Nirenoqui 楡の木という樹の皮で作った薬）ごくわん（＝薬用になるある木の皮）合歓（ネムノキ）木

①肉桂が植物として伝来したのは享保年間で、『日ポ』成立当時の我が国では見られなかったに相違ない。但し、薬物としては、『言継郷記』の永禄一二年の記事にも「木香　肉桂　白芷　藿香各一両召寄了」とあるように、既に伝来して用いられていた。

②「ゆはくき」は『新添脩治纂要』に「楡白皮（ユハクヒ）　和名　伊恵仁禮　麁皮ヲ削リ去リ白キ処ヲ剉ミ焙ブル付ケ薬ナドニハ生ニテ用ユ」と説明されている他、『和漢三才図会』[12]や、また『薬性名寄帳』[13]にも「零楡　ゆはく也」と記されていて、安土桃山時代から江戸時代にかけて、民間薬のひとつとして用いられていた様子の一端を垣間見ることができる。

③「ごくわん」に就いては不明瞭であるが、例えば『本草綱目』の第十六巻に見い出すことのできる呉藍などのような、他のものが誤記されたという可能性もある。

（九）全草・葉　十九語

香薷　荊芥　肉蓯蓉　石斛　沢蘭　薄荷　馬鞭草　益母草　ふつ（＝よもぎ）艾（＝灸をすえるのに用いる草）河原蓬　木賊（＝日本で灸をすえるのに使う草）薬師草　青木（＝木の一種でその葉は傷を癒す効力がある）あきぼこり　血止草（＝血の流出を止める草）枇杷葉　扁蓄　延命草（ヒキオコシ）

①木賊はトクサ科のトクサの全草を乾燥させた漢薬名で、『日ポ』の説明は、Tocusa を Magusa と取り違えたものらしい。

②薬師草、青木、血止草、「あきぼこり」を当時の民間薬として捉えることができる。このうち、「あきぼこり」は「めなもみ」の異名であるが、『徒然草』の九六段にも「めなもみという草あり。くちばみにさされたる人、かの草を揉みて付けぬれば、則ち、癒ゆとなん。見知りておくべし」[14]とその薬効が取り挙げられている。[註三]

（十）茎・枝・材類　七語

桂枝　木通　絡石（＝ある草）桑寄生　竹茹　竹の膚　竹瀝

①漢薬名である絡石は、『薬性名寄帳』を初めとする多くの本草書に於いて「ていかかづら（定家葛）」として取り扱われているけれども、現在では、クワ科のオオイタビの茎枝が正條品であるとされている。

②竹茹、竹の膚、竹瀝は、『日ポ』の説明によると、いずれも竹の内側の削り屑で、薬の中にいっしょに入れて用いられていたものらしい。

（十一）根・根茎　五十三語

雄黄（ウオウ）（＝大黄）鬱金　烏頭　烏薬　黄耆　黄芩　黄蓮　朮（Biacujut 白朮に同じ。根を薬用にするある草）甘松　玄参　蒿本

五加皮　牛膝　細辛　地黄　地骨皮　芍薬　常山　続断（＝Voni azami 鬼薊と呼ばれる草の根で薬の根で薬用になるもの）大黄　沢瀉　知母　人参　半夏　附子　防風　牡丹皮　木香　射干（＝Carasuvŏgui の根）竜胆　藜蘆（＝おもとの根葉になるある草の根）独活　地榆　秦艽　大戟――以上は『本草綱目』の〈本條〉の項に収載を見る――五加木（ウコギ）（＝この名で呼ばれる樹木。その根は薬用にし葉は和物にされる。またその幹はそれを入れて煮て酒を作るのに用いられる）遠志　莪茣　苦練根　香白芷　辛夷　山帰来　山薬　三稜　川芎　前胡　天瓜粉　野老（トコロ）　ととき（＝ととき人参。薬用人参の一種）　萆薢（＝Tocoro 野老に同じ。黄色の小さな人参のような苦味のある草根で薬用にするもの）白朮（＝Voquera朮 という或る草の根から取る薬）茅根（＝日本でTçubana茅花と呼ばれている或る草の根で薬用になるもの）房慈（＝Tçuzzuragusa 葛籠草 と呼ばれる草の根。またこの根から製した薬）

①苦練根が『日ポ』に於いて「薬に使う蓮根」と説明されているのは恐らく間違いで、薬用とされる栴檀の果実、即ち、苦楝子が誤記されて、誤まった解釈を招いたものと思われる。

②香白芷は白芷として、また、辛夷は木蓮、山帰来は土茯苓として『本草綱目』に記載されている。なお、このうち山帰来は、例えば貝原益軒の『大和本草』（一七〇九年）に「土茯苓（サンキライ）中夏より来る。白きを良とする。国俗是を山帰来と云。能悪瘡を治す」とあるように、和方書に於いてよく用いられた名称である。

③山薬はヤマイモの根を乾燥させて粉にした古くからの漢方薬で、『尺素往来』では「山薬、牛膝、牽牛子……等之和薬」と、和薬のひとつとして捉えられているが、これは、和産薬を意味したものであって、和方薬を意味するのではない。

④野老と萆薢は『日ポ』の説明どおり同じものを指し、後の『大和本草』にも「萆薢（トコロ）日本に昔より萆薢をところと訓す。是也」と記されている。

（十二）売薬・方剤　十四語

西大寺　牛黄円　透頂香　蘇香円　麝香丸　理中円　昆元丹　阿伽陀円　香薷散　清心円　万病円（＝ある人々の話では

あらゆる病気に効くという薬）葦芨円　しほう丹（＝蜜で作られる或る薬）蠟茶（ラッチャ）（＝中に茶の入った小さな塊のようなある薬）

①最古の売薬とされる西大寺、即ち豊心丹は、『金瘡秘傳』（永正元年）に至って初めて文献に登場したものかどうか、[15] それ以前の文献に関する報告と考察を期待したい。

②牛黄円、透頂香、蘇香円、麝香丸、理中円、昆元丹　阿伽陀円、香薷散、清心円、蠟茶のそれぞれは、『日ポ』成立以前の室町時代の文献に見い出すことができる。

③万病円は『江戸鹿の子』（藤田理兵衛一六九一年）に記載される以前、既に、『易林本節用集』（一五九七年）にも収録されており、いずれにしても、『日ポ』成立当時から出回り初めたことが推測される。

④「しほう丹」は、至宝丹と同じものであると考えられるだけで、葦芨円と共に詳細は不明である。

（十三）薬性・薬能等に関するもの　四十一語

薬　温薬　冷薬　補薬　瀉薬　粉薬　内薬　膏薬　煎薬　煎じ薬　薬石（＝薬用の石）丸薬　唐物（＝シナ渡来の薬）仙薬（＝仙人の薬。かのシナの隠者のような人々が授ける霊妙な薬）霊剤　霊薬　霊方（＝この世のものとも思われない効験のあるすぐれた薬）　天薬（＝霊方）　神仙の丹薬　消し薬（＝解毒薬）　解毒（＝ある種の薬）　気付薬（＝心臓の薬）　下し（下剤）　腎薬　眼薬　血止薬　血縛（＝血止めの薬）　差薬（＝眼薬。[註四] また下では、未成熟の嬰児を胎内からおろすための薬）　癒薬（イニグスリ）（＝腫物、あるいは傷を治す薬）　息合（イキアイ）（＝元気づけのために疲れた馬に飲ませる薬）　君薬（＝薬のよい材料）　薫薬（＝ある匂いのよい薬）　合せ薬（＝種々の材料を調合した薬）　総薬（＝種々の異なった病気に用いるさまざまな薬に入れるところの薬種）　百薬（＝多くの薬）　百草（＝薬にするために焼く百種の草、時としてはその代わりとして火にかけた鍋の底にくっついている煤を用いることがあるが、それもまた百草と呼ばれる）　黒焼（＝黒くなるまで炒るか焼くかしたもので薬用にするもの）　五木湯（＝薬用になる五種類の木で作る洗滌用あるいは内服用の薬湯）　六陳（＝どんなに古くなっても決して損ずることのない六種の薬）　自薬　桑酒

①百草は、信濃の御嶽山で製されるものを初めとする胃腸薬で、『譚海』に「五月五日百種の草を採集て、其夜露をうけて、翌日より毎日炎天にほしかためて、後黒焼にすべし」とあるのは、『本草綱目』の「白草、蔵器曰、五月五日采二百種草一陰乾焼灰和二石灰一為レ団」なる記事を継けたものであろう。

②五木湯の五木は、桑、柳、桃、楮、槐を指す。

③六陳としては、『和漢三才図会』の山草類・薬品の項に「狼毒　枳實　橘皮　半夏　麻黄　呉茱萸」の名が挙げられている。

なお、今回くすりに類した語としては取り上げなかった春の七草名のうち、『日ポ』に見い出せるのは「せり　なずな　ごぎょう　ほとけのざ　すずな　すずしろ　はこべ」であって、春の七草のひとつとも考えられ、また、「ほとけのざ」や「はこべ」の別名であるとも言われている「たびらこ」（田平子）」は、「はこべら」（「はこべ」の古名）と共に記載されていない。

*

以上、くすり関係の用語は多岐にわたって収録されているが、これらが現実の生活の中でどの程度役立てられていたものか、『日ポ』に付記された説明事項からは読み取ることはできない。前述したように、『日ポ』成立当時の我が国に伝来していない薬物もいくつか混じっている可能性があり、医療の実態を知る上に於いては、やや不備な資料と言わねばなるまい。くすりに関するこうした語彙の豊饒さとは逆に、一五八四年一月六日、パードレ・ロレンソ・メシアがパードレ・ミゲルに当てた手紙は、当時の医療状況の次のように述べている。

「……日本人は一般に甚だ健康であるが、気候の温和で健康に適した為と、多く食わず、又多くの病の原因となる冷水を飲まぬ為であろう。而して病むことがあっても殆ど薬を用いず、短期間に健康を回復する」(16)

時代の気風は、生きている人間の皮膚を通して肉体を織り成し、いつにあっても、健康や疾病に働きかけるもののようだ。

文献

(1) 真木悠介著「時間の比較社会学」　岩波書店　昭和五六年。
(2) Mbiti, John, S 著「アフリカの宗教と哲学」(大森元吉訳) 法政大学出版局　昭和四五年。
(3) Michel Foucault 著「言葉と物」(渡辺一民・佐々木明訳) 新潮社　昭和五三年。
(4) 宇佐美圭司著「絵画論」　筑摩書房　昭和五五年。
(5) 「太平記」第二五巻 (日本古典文学大系35　岩波書店　昭和三八年)。
(6) 津村淙庵著「譚海」(日本庶民生活史料集成第八巻　三一書房　昭和四四年)。
(7) 清水藤太郎著「日本薬学史」南山堂　昭和二四年。
(8) 「新添脩治纂要」西村又左衛門版　寛永一七年。
(9) 篠崎東海著「不問談」國書刊行会。
(10) 李時珍著「頭註　國譯本草綱目」春陽堂。
(11) 「譚海」前掲書。
(12) 寺島良安著「和漢三才図会」正徳三年版。
(13) 本郷正豊著「合類薬性名寄帳」正徳五年。
(14) 吉田兼好著「徒然草」(日本古典文学全集27　小学館　昭和五七年刊本)。
(15) 「日本薬学史」前掲書。
(16) 「耶蘇会の日本年報」第二輯。

註一　文蛤は五倍子の異名である。
二　李時珍の「本草綱目」のこと。
三　蝮(まむし)のこと。
四　『日ポ』では近畿方言を Cami (上)
九州方言を Ximo (下) と標している。

(東京医科大学第二解剖学教室)

付記

前川久太郎教授が、一月二十日脳出血のため急逝なさいました。『日葡辞書』の医史学的解明のお仕事の途中のことでもあり、遺憾の念に堪えません。ここに、前川教授の御逝去をお知らせ致しますと共に、心より教授の御冥福をお祈り申し上げます。

Medicine in the Azuchi-Momoyama Era as Seen in the Japanese-Portuguese Dictionary

(2) Medicines (herbs, folk remedies, patent medicines and so forth)

by

Setsuko KAME, Akira OHTSUKI, Kyūtaro MAEKAWA

This paper is an attempt to find all types of words relating to medicines in "The Japanese-Portuguese Dictionary" and to introduce them.

We first picked out one hundred and forty-eight words and divided them according to their material quality such as the following; 1: mineral (thirteen words), 2: animal (fifteen), 3: plant (one hundred and twenty). Next we picked out fourteen words with meanings of patent medicines or compounded ones, and another thirty-nine words referring to medical effects or dispositions. Thus in this paper we present two hundred and one words in all.

Many of them are names of Chinese drugs and it is hardly possible to detect medicines peculiar

to Japan. We can only suggest that such herbs as Yakushiso (薬師草), Aoki (青木), Chidomegusa (血止草), Akibokori (あきぼこり), were used as folk remedies. Another suggestion is the possibility that two patent medicines, that is, Manbyo-En (万病円) and Shiho-Tan (しほう丹) did not appear until those days.

At any rate these words we introduced say little about their actual usage. For instance, Shikunshi (使君子) and Sanzashi (山査子) recorded in this dictionary are said to be imported for the first time to Japan much later, so we have to notice the possibility of this dictionary's containing of some drugs which were not yet seen nor used at that time in Japan.